

# 平田真紀が 橋一洋の本

服部鳥獣剥製店  
prose poems  
2015



散文詩集『服部鳥獣剥製店』はとても計算しつくされた1冊だ。狙って狙った剛速球だ。

冒頭に置かれた「ランチメニュー」は散文詩ではない。この短い不思議な詩の次には、短い散文詩が置かれている。言わずもがなの「read me」に導かれて読者は早くも作者の術中にはまる。そこからしばらく、普通なようで普通でない、淡々としていながらたっぷりとおかしい、ふしぎな散文詩が続く。いつもながら橋作品は導入が巧みだ。サイの自転車レーサーと理髪店の店主の関係を空中に投げつけたまま、「ひらくドアにご注意ください」からまた別の情景が語られる。えっ、これは何、どういうこと、どういう状況、と思わされたかと思うとまた別の。この本の前半部分に置かれた詩は、平明な言葉と文章で書かれており、文そのものとしては簡単である。わからない言葉も表現もない。ただ、書いてある内容がおかしい。

ところで、現実とは、いったいなんだろう。

この本の前半の散文詩に書かれた、おかしい内容は、夢の中の話のようでもある。それぞれの詩の最初に「こんな夢をみた。」と書かれていたとしたらどうか。つまらない！これは夢の話ではなく、現実の話なのだ。ありそうもない、いや、実はありそうな、現実の話。では現実とは何か。

現実とは、どこかおかしいものなのだ。世界は整然としているようで、実はあちこちで破綻している。その破綻をすどくとらえ、有り体に描写すれば、あるいはこれらの散文詩のようになるのではないか？それはたぶん「写生」と似た方法だが、使っている感覚器官が違うのだ。

2012年の『レモン小路』で作者は、世界の様相を1編の長い長い詩によってつかみ出そうとした（のだと思う）が、この『服部鳥獣剥製店』でもやはり、また別の方法によって、現実世界の姿をとらえようとしているのではないか。

橋一洋はどこまでもドライな作家であると思う。彼は感情を吐露しない。彼の感情は理性の姿をかりて作中に姿を現す。彼の描き出す現実世界は、以前から一貫して、ふんわりと彼を拒んでいる。世界と彼との間の埋まらない溝は、列車とホームの間のように、時に広く、時に見えないほど狭く、しかし塞がることはない。そしてその溝は、ある種の者が、世界や現実に対して共通に抱くギャップの感覚でもある。橋一洋のこれらの散文詩がいかに奇妙な情景を提示し、それがいかにか見たこともないものであろうと、ある種の読者は、その奇妙さの度合いにおいて既視感を感じるだろう。

見たことも聞いたこともないが、知ってはいる、というような。

『服部鳥獣剥製店』は48ページあたりから急展開を迎える。それまでの平明で簡単な文を抜け出て、研究論文のようなスタイルの詩がならびはじめる。歩きやすいと道だと思って平気で散歩していたら険しい山道に入ってしまう。わからなくなっても先へ先へと歩かずにはいられない心境に、すでに読者は陥っている。読者は何もかもを見失う。

最後に買い物メモが示される。この7つの品目の、なんと非情なラインナップ！すべてが読者に、「何も見せないよ」と言っている。『レモン小路』とくらべると、たいへん辛口の構成である。垣間見て、垣間見て、垣間見た先に与えられるのは、1枚のアイマスク（目隠し）である（そういえば始まりのランチメニューも、なんだかいやなメニューであった）。これだからひらくドアには注意しなければならぬのである（？）。

これは「poems」であって「a poem」ではないが、1冊としての構成が考え抜かれているので、全体で一編の詩のように機能していると思う。以前に手書きの原稿をばらばらに見た時には、それぞれは面白いと思っても、このような詩集になるとは思っていなかった。作者の構成力がすさまじい。「服部鳥獣剥製店」というタイトルもいい。表紙絵も色味が抑えられていい。どこかの建物の裏側のような、でもはっきりとわからないところに、なにか植物らしき緑が見える。何なのかかわからないところがいい。

現実がよくみえない。どこかおかしい。自分もどこかおかしいが、現実のほうが、よりおかしいような気がする。それはもちろん「世の中間違つるとよ（byクレイジーキャッツ）」というようなことではない。嘆くようなことでもない。作者は淡々としている。読者はこの「橋劇場」の観客としてひととき、どこかおかしい現実を体感するが、劇場から出たあとで見ると、読者ひとりひとりをとりまくそれぞれの現実こそが、さらにおかしいものなのだを知るのだ。面白い本だ！よくできた、ちょっといやな映画みたいだ。ちょっといやと言いつつ、魅入られたようにまた巻き戻してしまおう。

多重債務  
poems  
2016



何かを言いながら何も言わない、ということはどこまで可能なのだろうか。また逆に、何も言うべきことがないのに何かを言い続けることは？『多重債務』はそのことを考えさせる詩集である。作者がそのことに挑戦したものかどうかはわからないが、読者にはくっきりとそれが提起されているように思う。

「ここは／緩やかな大きい部屋」なのだ。

以前に仮に編まれた『多重債務』ドラフト版からこのたび再編集されるにあたって、作者はほとんどの詩稿に手を入れたようである。それは全体を通して読むと、「全体を通して読む」前提、つまりこの一冊の詩集のための詩へと、個々の詩を転換させる作業であったのではないかと。

一冊全体を通して読むと作品性が色濃く立ち上がるというスタイルは、既刊の『なぜならば』『レモン小路』（ともに a poem）、『服部鳥獣剥製店』（poems）と最近の作者の詩表現を特徴づけているが、『多重債務』からは『レモン小路』が特に強く連想される。詩集全体に鉄道やバスの気配が充満している点が、小路を歩く気分と似通っているからかもしれない。

『レモン小路』ではしかし、小路をそぞろ歩いた末にある種の明るい、救いのようなものが提示されているが、『多重債務』にはそれが無い。用意もされていない。辿った先（時間でいえば未来）に明るさが用意されないだけでなく、辿る道筋（現在）にも暗さや不満、それを打開したいという欲求の類が提示されない。何事も無いところから始まり、何事も起こらず、何事もなく終わる。

個々の詩のなかで、作者は意図して断定的な語調を避けているように感じる。ドラフト版の詩から、断定や、結論めいたことや、強いインパクト、強い色や匂いや味などを喚起する表現を注意深く消して一というより映像にモザイクをかけるようにぼかして、この完成版は編まれているのではないかと想像する。ぼかされるのは詩に書かれている内容・対象にとどまらず、あからさまな比喩、反復表現、主述の整合性など言語表現の形式にまでも徹底されている。つまり個々の詩からなる一冊の詩集全体が、言ってしまえば「なにやらはっきりしないもの」としての調整を厳しく受けているのである。

多重債務というタイトルは絶妙である（いつもながら）。（No.12の詩の末尾で初めて「多重債務」という言葉が詩集に登場するが、よくできた映画のタイトルコールのようにすばらしいタイミングである。）

具体から抽象へ、また具体へと思ったら韻を踏む言葉遊びへと、詩の中で読者は揺さぶられ続け、そこで冒頭に記した「何かを言いながら何も言わない、ということはどこまで可能なのだろうか」という命題が頭をもたげているのである。ここには詩の「なにか」としての具体・抽象の問題と、「そとがわ」としてのシニフィアン・シニフィエの問題が同時に含まれている。高度な表現である。やわらかい、とっつきやすい顔をして、橋一洋の詩表現は以前よりも明らかに高度に研ぎ澄まされている。作者一流のバランス感覚なくしては、到達しえない高みであろうかと思う。

この『多重債務』には、それでは何も書かれていないのだろうか？

いや、確かに書かれているのである。見慣れた文字と平明な言葉で。時には韻を踏んでリズムカルに。しかしそれは「焼き鳥とオマール海老」という具体が少しも具体的でないように、何かを指し示すことがないのだ。作者はそれを名づけて「多重債務」であるという。もはやどこからも整理のしようのない債務、解決の糸口はすでに失われ、解決するという発想さえももつれた糸の中に埋もれ忘れられている。もはや原罪のごとき債務。作者は主張をしないが、どこまでも平和な悪夢としてのこの世界を、一冊の詩集によって描き出そうとしたのではないか。（「世界とは、一人の人間の生きている間の時間の総体である。この場合、「その60 奥人分の総体」とは関係ないように思う。）

確かに何か起こっているが何も起こっていない、何かを言っているが何も言っていないという詩のたまたまは多分に東洋的な世界観を匂わせている。「色即是空」である。私には親しい感覚である。意味とは均質な無意味のスープに偶然起こった凝りであり、確かに「意味」ではあるが本質的には意味などないのだ。凝りはまたほめて均質化する。「人々は散ってゆき／鈍い照明が残る」。そして繰り返される。

しかし『多重債務』は退屈な詩集では全くない。さらさらと水が流れていくように自然に、読者は52編の詩を辿りたくするし、辿り終えたらまた最初から辿りたくする。魅せられたように。この効果は何に起因しているのだろうか？ この詩集は作者の周到な企みによって編まれているが、これ自体が一つの現象へと昇華しているのかもしれない。